

巴金と林疑今

——新聞連載小説の「時事性」をめぐる一考察——

河村昌子

一九三一年の初頭、巴金のもとに新聞連載の依頼が初めて舞い込んだ。当時巴金は二六歳で、作家としてデビューして約二年、まだ駆け出しだったが、上海の大型紙『時報』に長編小説を連載することになる。こうして誕生したのが『激流』、すなわち後に五十版を優に越すほどのロングセラーとなる小説『家』である。

周知の如く『家』は、巴金の名を一躍スターダムにのし上げた作品で、今日に至るまでその人気を誇っている。しかしながら、『時報』掲載中から傑作扱いをされていたとは思えないふしがある。『激流』は、一九三一年四月一八日から一九三二年五月二二日までの約一年間、計二四六回にわたって『時報』紙上に連載されたが、この間、掲載が飛び飛びになった時期、まったく掲載されない時期もあつたりした。この辺りの事情について巴金は、「関於『激流』」で次のように回想している。

『激流』はしばらく休載されたが、新聞社は私に何の連絡もよこさなかつた。そのうち紙面には、他人の小説が出てきた。林疑今のものであり、沈從文の作品（例えば『記胡也頻』）もあつたと記憶する。いずれも長く

はなかつた。私の小説については、ずっと音沙汰無しだったが、私の方でも新聞社に問いただしに行ったりはせず、ひまがあれば書き続けていた。(中略)それから私は、小説は、ゆっくり書いてゆくと、書けば書くほど長くなるものと気づいた。新聞社に文句を言われるかもしれない、早めに終わらせた方がいい。さつさと結末をつけることにし、瑞穀の死まで書き終えたとき、案の定新聞社から手紙が来て、私の小説が長すぎると苦言を呈し、約束の字数を超えていると言ってきた。手紙にははつきり私の作品を「打ち切る」とはなかつたが、意図は明々白々だった。先方が私の小説を最後まで載せるかどうかなどどうでもよかつたが、そもそも作品を何字以内で終わらせよという取り決めはなかつた。ただ、編集者が替わっていたので、新聞社とやり合っても結果ははかばかしくないだろうと思われた。

つまり、名作『家』の前身である『激流』は、打ち切りの危機に瀕していた。

巴金は時報社に対し、連載再開と全編掲載を求める。この際、交換条件として、原稿料の辞退も申し出た。この提案が功を奏したのか、時報社は巴金の要求を容れる。『激流』は、一九三三年一月二四日、休載に関する時報社の謝罪文とともに『時報』紙上に再登場し、日の目を見た。

時報社の謝罪文とは、次のようなものである。

『時報』では、巴金先生の書き下ろし小説『激流』を、昨年すでに六ヶ月にわたって掲載していましたが、九一八事変が勃発して困難ニュースを多く載せたため、連載を続けるスペースがなく、二ヶ月近く休載しました。作者ならびに読者諸氏には、誠に申し訳ございませんでした。本日より一部のスペースを割き、毎日欠かさず掲載します。五六週間以内で掲載し終わります。李先生には、別に中編小説もご執筆いただきます。その他、林疑今先生にも、中編小説『上海交響楽』を書いていただくことになっており、同時掲載する予定で

す。沈從文先生の青島からのお便りでは、冬休みが終われば原稿をいただけるということで、来月には『時報』紙上で発表できるでしょう。諸先生方の作品の価値は、すでにおおかたの公認するところであり、ここでは贅言を控えます。²⁾

『激流』がなぜ連載を中断されるに至ったのかと言えば、「關於『激流』」に基づけば、小説が長すぎたこと、編集者が交替したことの二つの理由がある。⁴⁾ また時報社の謝罪文からは、国難ニュースの多さという時事的な事情で紙面が変化し、これに影響を受けていたことが分かる。⁵⁾ あるいは『激流』は『時報』読者の興味を十分に引きつけられていなかった、という憶測も成り立たないとは言えない。しかし真相は闇の中であり、連載中断の具体的な理由を詮索することは、本稿の目的ではない。

ただ、『激流』が『時報』と齟齬をきたしていたのが事実である以上、『激流』をめぐる様々なコンテクストを明らかにすることは、『激流』という作品の特徴や、作者巴金の執筆態度を考える上で、充分有益だろう。ここで筆者が注目したいのは、右の二つの文章に共通して見られる林疑今、沈從文という作家の名前であり、とりわけ、これら二作家の作品が、言わば『激流』を差し置く形で『時報』紙面に登場した、と感じている巴金の認識である。ついでには林疑今、沈從文の作品が、『時報』紙上で『激流』とどのように絡んでいるのかを、確認してみよう。

二

二作家のうち沈從文の『記胡也頻』は、一九三一年一〇月四日から一月二九日まで、『時報』紙上で計三四回にわたって連載された。当時すでに度々休載されていた『激流』とは、まさに後から割り込んで、紙上で競合する関係にあったと言える。ちなみに時報社の謝罪文中にある「冬休みが終わればいただける原稿」とは、一九三

二年八月四日から九月八日まで連載された『儒夫』を指すものと思われる。

もう一人の林疑今については、少々説明を要する。

「關於『激流』」の記述からすると、『激流』は一度休載され、巴金がこれに抗議し、再び連載されるようになったと受け取れる。が、時報社の謝罪文が掲載されたという事実を重視すると、大きな休載期間は二回あったと言える。すなわち、一九三一年一月二九日から一九三二年一月二四日までと、一九三二年一月二八日から三月一六日までである。一九三二年一月二八日とは、言うまでもなく上海事変が勃発した日である。『時報』はこの後、号外主体の報道体勢に切り替わっており、通常スタイルでの発行が、通常面数の半分にあたる四面のみという不完全さながら再開されたのは、ようやく三月一六日のことだった。『激流』は、連載が再開してわずか四日、上海事変のため再び休載の憂き目にあつたのだ。

林疑今の名は、この一回目の長期休載期間中までには見られず、従つて、巴金が『激流』休載について時報社に抗議した以前に、林疑今の作品が『激流』を差し置いて紙面に登場した事実はない。上海事変の混乱のさなか、二月の号外紙上には、林疑今の『某夫人』という小説が掲載されているが、彼の作品が本紙に登場するのは、『激流』の連載が終了してかなり後の一九三二年一二月、計一九回連載されて打ち切られた『上海兩少女』を待つことになる。⁶

上海事変勃発後、上海の有力紙は、本紙を通常どおりに発行せず、いずれも号外体勢を組んでおり、『時報』もこの例に漏れない。この時期の『時報』号外は、上部に「時報」の二文字がアールヌーボー風の大きな飾り文字で横書きに記され、モダンな独特の趣きを持っている。しかし『時報』の「号外」自体は、体裁は異なるが平時にも発行されていた模様で、一九三二年一月一、二日付の号外⁸には、やはり林疑今の『台湾的女兒』という小説

が掲載されている。林疑今の『某夫人』は、むしろこの延長線上にあるものと思われる。

巴金が、林疑今の作品が『激流』を差し置いて紙上に現れた、と回想しているのは、推測すれば、『激流』の二回目の休載期間中である上海事変中の混乱期、『某夫人』が号外紙上に掲載されたという記憶によるものだろう。

さて、筆者は、林疑今という作家を巴金が何らかの違和感とともに記憶している、この点に注目したいと思う。我々は、林疑今に目を向けることで、『激流』をめぐるコンテキストの一つを解き、『激流』の新しいイメージを得ることが可能なのではないか。林疑今の作品は、相対的に『激流』の特徴を照らし出すのではないか。以下、林疑今のテクストを検討することを通じ、『激流』をとらえ直してみたい。

三

林疑今¹⁰（一九一三年四月九日——）は、本名林宝泉、字は国光、福建龍溪の人。翻訳家。小説家。林語堂（一八九五——一九七六）の次兄林玉霖（一八八七——一九六四）上海セント・ジョン大学、廈門大学教授）の長子である。ペンネームに疑今、麦耶夫がある。

一九二九年から一九三一年まで上海東呉第二中学に学び、一九三二年上海セント・ジョン大学に進学。一九三五年セント・ジョン大学を卒業すると、香港セント・ステファン書院へ移った。翌一九三六年にアメリカへ留学、コロンビア大学研究院で英米文学を専攻している。一九四一年に帰国してからは、中央銀行経済研究所に勤務し、英文季刊の出版に携わった。一九四七年から一九五七年まで、交通大学、滬江大学、復旦大学、廈門大学で英語を担当。一九八八年の時点で、廈門大学外文系教授、系主任を務めていた模様である。

最も早く公に発表された文章は、管見の限りで「關於文芸作品的派」（『語絲』第四卷第五〇期、随感録二二一、

署名は疑今)。この時林疑今は一四歳⁽¹¹⁾だった。

東呉第二中学在学中から、著訳書を多数発表し始める。訳書には、『西部前線平静無事』(Remarque *Im Westen nichts Neues* 水沫書店一九二九)、『戦争』(Remm *Krieg* 東華書局一九三〇)、『山城』(Sinclair *Mountain City* 現代書局一九三〇)、『四十年代(上)』(Gor'kij *Жизнь Крима Самриха* 聯合書店一九三二)、『戴茜米勒尔』(Henry James *Daisy Miller* 中華書局一九三四)、『戦地春夢』(Hemingway *a Farewell to Arms* 西風社一九四〇)などがある。アメリカ文学以外は英訳本から中訳している模様で、英語力を活かしての仕事だろう。翻訳ではアメリカ現代文学の紹介が、林疑今の特徴的傾向のひとつと言える。

著書には、『旗声』(聯合書店一九三〇)、『中学時代』(神州国光社一九三二)、『江南的春天』(四社出版部一九三三)、『無軌列車』(良友図書印刷公司一九三五)の四点、いずれも長中編小説と、ほかに戯曲で『秋水伊人』(中国文化服務社一九四七)のあることが確認できる。

先に述べたように、一九三二年の『時報』本紙および号外には、林疑今の小説『台湾的女児』『某夫人』『上海兩少女』が見られる。この年彼は一八、九歳で、東呉第二中学卒業後、もしくはセント・ジョン大学在学中であろう。すでに訳書数冊と長編小説一冊を発表していたことになるが、小説家としてはかなり若年と言えよう。

さて、おそらく巴金が問題視した作品だと思われる『某夫人』は、一九三二年二月一七、一八日付号外まで、計一八回にわたって連載された⁽¹²⁾。マイクロフィルムに欠本が多く、また印字が不鮮明なため、全体像を正確につかむことはできないが、目にできる範囲から小説としての特徴を探りたい。まず第一〇回を見てみよう。

薄暗い片隅に、流行のファッションの少女がひとり腰かけている。緑色の旗袍に身を包み、髪はライオンのたてがみのように耳に垂らしている。両ひじをテーブルに突き、小さな美しい顔を支えて、どこか物思い

に耽っているようだ。

彼女は華洋女塾を卒業したばかりで、墨子や荘子の学説はよく分らないが、シェイクスピア、ミルトン、ディケンズにはかなり詳しい。父は上海のある銀行の頭取で、財力が彼女の美貌をいつそう有名にしていた。

(中略)

少女は窓の外の曇り空を見やり、窓ガラスについた雨の小粒にも目をやった。ぼんやりとした様子で、銀色のハイヒールを履いた左足を床にトンと打ちつけると、うつむいて手にした金時計を覗き、またそつと長いため息をついた。

「グレタ・ガルボとリリアン・ギツシュを比べようなんて無茶だよ。」学生服の青年が、片手に映画のチラシを持ち、もう片手で机を叩きながら、大声を張り上げている。

「ばかだな、リリアン・ギツシュの『散りゆく花』を見たのか？」

『散りゆく花』！何だそれは！」

「もういいよ。」小柄でふっくらした青年が口を差し挟んだ。「俺たち明日は物理の試験だぜ。」

「物理哲理がなんだ、どうせ教授たちは見かけ倒しじゃないか、受からなきゃ付け届けを渡せば済むことさ。」

「あはははは…」

少女はたてがみのような豊かな髪をゆすり、つるつるした床に銀色のハイヒールをまたトンと打ちつけた。

突然、回転扉に中年の男が現れ、彼女の方に向かってきた。流行遅れの洋装で、細身のスラックスの足をキセルのように引きずっている。

「Good afternoon、ミス許！お待たせして申し訳ありません。もつと…もつと早く来ようと思っていたんだ

が、昔の同級生が訪ねてきましたね、今までかかってしまったのですよ。本当に申し訳ない……」

少女はあしらうように二言三言応えた。美しい瞳を窓の外へ泳がせたまま、ほっそりした小指をつまらなそうに噛んでいる。

「コーヒーをお飲みになりますか？ ミスター王。」

「いや結構、ありがとう、自分で頼んできました。」

「今日はちよつと寒いですわね。」ミス許がゆつくりと言った。

「あ、そう、そうです、随分寒くなりました。これはモンゴルの低気圧が東南方向へ移動したせいなのですよ。」

昨日徐家匯に行きまして、今日は雨だと思っておったんです。笑わないで、でたらめじゃない。これは天文学の法則です。(中略)」

「Say、ミスター王、あなた天文学以外に興味をお持ちのことはないの？」

「それは、それは……」

一読して目に付くのは、女性のショートヘア、女学校、イギリスの現代小説、蓄音機、グレタ・ガルボ、リリアン・ギッシュ、回転扉、カフェといった、モダン都市上海を象徴するアイテムが、所狭しと散りばめられている点である。中間に挿入されている学生の会話など、説明的で膨らみがなく、唐突に始まって唐突に終わっており、人気女優の名を出すことのみ在意図があるようにさえ思われる。作者は、当時の上海の読者が同時に共有する事物を利用し、描写の巧みさによるよりもむしろ、これら共有されるアイテムを鍵にして喚起される想像によって、効果を生み出そうとしているのではなからうか。少なくとも、この小説の生命が「現在」との連動にあることは、疑い得ないだろう。

次に、第一一回以降の内容をめぐりに追って、小説の構成方法も含めた特徴を確認してみよう。尚、ゴシック体で示す部分は、小説中の小見出しである。

第一一回

「ハロー、裘麗」と声をかける紅い旗袍の少女。裘麗は彼女に王を *Fiance* だと紹介する。少女たちは *Graton Fabrics* の布地について語り合う。王はその場を辞去する。洋装を着こなした、蘇州風の白い小顔をした青年（桐卿）が裘麗を訪ねてきて、駆け落ちする決心をするよう裘麗をせかす。逡巡を示す裘麗。夜になって裘麗は決意を固め、両親と天文学者に手紙を書き、荷物をまとめる。

第一二回

家の者に自動車を走らせ、桐卿のもとへ向かっていた裘麗は、赤信号で車窓の外に程家の車を見つける。程家の車は藍月ホテルの前で止まり、桐卿が踊り子風の女の肩を抱いて降りてきた。絶望して泣き笑いする裘麗。末尾に「挿入曲終わり」の文字。

第三部曲 小序曲 女学生は犯され、男子学生は殺戮される

ここから「××哥」宛ての書簡体になる。「私」は天津から涙にくれて便りをしている。何故天津にいるかと言えば、家庭の事情で南京の金陵から東北大学に移り、秀妹も附属中学で学ぶようになったからだ。

第一三回

一昨日一八日の夜、突然ピストルと断末魔の叫び声が聞こえ、秀妹が、現れた四人に目を付けられた。止めに入った同級生は刺され、「私」は逃げた。後から秀妹が強姦され首つり自殺したことを知った。

暗闇の中で

「母さん、外国兵が来たよ」と、息子が母に話しかけている。請願行動をしていたら、兵が突然入ってきて工場に戻るよう迫られたこと、機関銃で威嚇射撃されたことを訴える。息子阿猛はこっそり逃げてきたのだ。母は恐怖におののく。

第一四回

阿猛はわずか一六歳ながら、紡績工場の労働者である。母は寡婦暮らしが長く、つましく平穩に暮らしていた。ところが九月から工場でストライキが始まったのだ。工場に閉じこめられた労働者の中には、餓死してゆく者もあった。

講堂にて

講堂は愛国的な男女で埋め尽くされている。校長が「学問のために救国を忘れず、救国のために学問を忘れず」という標語を読み上げる。劉国華同志が立ち上がり、紡績工場の労働者を称える演説をする。熱狂的な演説会が続く。

第一五回 欠本

第一六回 欠本

第一七回

「裘麗！」という夫の声。明日の朝早く起きて荷物をまとめるようにと言われ、裘麗は夫劉定国に、自分は東京には行きたくないと訴える。寝室で物思いに耽る劉夫人。突然「刺客だ！」という声がある。劉夫人が客間に駆けつけると、夫は無傷だった。刺客は子供で、阿猛だった。捕らえられた阿猛は劉に、「売国奴！奸商！」と叫ぶ。

第一八回

劉夫人は阿猛を放すよう要求し、夫に中国人として愛国心を持つべきだと主張する。夫は交換条件として、東京への同行を求め、夫人は承知する。五、六分後、一人の青年がそつと庭から出てゆく。客間では主人が葉巻をふかし、夫人はピアノを弾いていた。

全体として、やはり象徴的な道具立てが多く用いられていることが見て取れよう。モダンな令嬢、上海の高級衣料店、婚約を無視しての駆け落ち、ダンスホールの踊り子、恋人の裏切り、強姦、虐殺、外国兵の発砲、愛国と、思わせぶりなだけでなく、流行、モダン、猟奇等々の要素がどの回にもふんだんに盛り込まれ、読者の興味を引きつけようという工夫の跡が見てとれる。

そして、小見出しを多用して、まるで無関係そうな新しい場面を提示してゆく構成からは、作者の実験的な意欲が汲みとれる。ほとんど前後の脈絡無しに新しい登場人物が次々と現れ、場面もくるくると転換して物語的にはつながらない。が、裘麗、紡績工場、阿猛少年といった人物や事物をとつかかりにして、ところどころでシナプスのように連関が生まれているのだ。

率直に言えば、『某夫人』は実に読みづらい小説である。一本の通ったストーリーを持つ小説ではない上に、一回分の掲載量（約千字）の範囲内で、度々場面が転換し、展開がきわめて早い。待ち合わせて現れたはずのフィアンセが、会話らしい会話もせずすぐに立ち去る不自然さなど、作者の技量のつたなさによると思われる欠点が見える。しかしこれまで述べたような独特の工夫も見られる。作者は何をねらっているのだろうか。

後年になるが、林疑今は、アメリカ現代文学を紹介した文章「美国当代問題小説」⁽¹³⁾の中でジョン・ドス・パソスを取り上げ、次のように述べている。

この作家は、あるいは現在アメリカで最も重要な作家かも知れないと、少なくとも筆者個人は思う。(中略)『U・S・A』で彼は、横断面描写という斬新な手法を用いている。我が国の旧小説の章回体に似ているが、人物間の連関が少ない。(中略)ドス・パソスの著作は、芸術的にきわめて特殊である。たとえば六、七人の典型的な青年の伝記を書き、その間にいわゆる「ニュース映画」「カメラ・アイ」「偉人伝」を差し挟んでゆくのである。書かれたものは緊張感があつて面白く、映画のようである。

実は、後の長編『無軌列車』^(註)は、明らかに『U・S・A』を意識した小説で、数人の若者の物語が細切れに語られる中に、中国の歴史上の人物伝や、時事的事件の記述が差し挟まれるというものである。林疑今には、ドス・パソスのように社会の網の目を描くことで全体として立体的な絵を提示しようという志向があつたのだ。『某夫人』が発表された一九三二年当時、すでに『U・S・A』の第一部『北緯四十二度線』(一九三〇)は出版されており、アメリカ現代文学に造詣の深い林疑今ならば、当然目にしていただけと思われる。『某夫人』の実験は、ドス・パソスへの志向が現れた初期の姿と見なせるのではなからうか。

四

さて、話を冒頭に戻そう。巴金の『激流』は、作者の懸命な交渉を経て、打ち切りの危機を脱し、時報社は休載の経緯を説明して謝罪するに至った。だが釈明文は、五、六週間以内で『激流』は終了すると明言し、更に林疑今の名をあげて、新連載への期待を喚起している。おそらく時報社側は、『激流』を打ち切る心づもりで、すでに林疑今を交代要員として準備していたのだろう。

では、林疑今は時報社期待の大型作家かと言えば、そうでもないようだ。一九三二年一月二日から連載が

開始した『上海兩少女』は、計一九回で打ち切られている。『某夫人』にしても、最終第一八回の幕切れはかなり唐突で、打ち切りと見なせなくもない。林疑今は『時報』にとって、さほど重要な作家でもなからう。

『時報』の意図の一端を考える上で、いささか目を引くのは、『激流』から『某夫人』そして、『某夫人』の後を襲った阿呆の『往那裏逃』という、作品掲載の流れである。『往那裏逃』¹⁵は、戦乱で逃避を余儀なくされた一家の生活を描いた作品で、折しも上海事変の混乱の最中、当時の人々の実状にマッチした、極めて時事的な小説であると言える。また林疑今『某夫人』は、本稿で述べてきたように、ドス・パソスの手法を意識し、モダン都市上海の象徴的アイテムを随所に散りばめ、小説と小説を取り巻く環境の「現在」とを連動させることで、効果を生み出そうとしている作品である。『激流』から次第に、より同時代的な、更に時事的な小説へと、掲載作品が変化していることが見て取れよう。

『激流』の時代設定は五四時期で、発表当時から、およそ十年過去に遡っていることになる。また、物語の舞台は、「ある地方都市」である。固有名がぼかされているのでいくらか普遍性を帯びているものの、明らかに巴金の生地四川省成都が下敷きになっており、少なくとも『時報』の本拠地上海になぞらえることは不可能だ。つまり『激流』は、「過去」の「どこか」の物語として誕生した。

だが、『激流』即ち『家』は、なにがしか「現在」的な影響力を、長年にわたって有し続けている。同時代的に見ても、林疑今の『某夫人』や阿呆の『往那裏逃』のような、即時的な共時性、時事性は持たないものの、時代に即した社会派小説であることは否定できまい。

では、小説と「現在」との、巴金的な連関を、私たちはどうとらえればよいのだろうか。

巴金は、『激流』の連載を開始した際、まず『激流』総序¹⁶をものして、次のように述べている。

私には見える。どんなところでも生活の激流は揺らぎ、己の道を創造し、山や岩の合間を縫って進んでいる。この激流は永遠に揺らぎ続け、かつて止まったことはなく、止めることもできない。何物もこれを阻めない。その途中には、いろいろな水しぶきがあがっている。愛あり、恨みあり、歎びあり、苦しみありだ。これら全てがすさまじい激流となり、山をも崩す勢いで、唯一の海へと流れてゆくのだ。この唯一の海とは何か、いつこの海に流れ着くのかは、誰もはっきり知ることはできないが。

激流は、最終的に「唯一の海」へ流れ着くという。巴金にとってそれは、阻むことのできない必然のようだ。「激流」というタイトルは、「時流」という語を容易に想起させるが、時代の流れの行き着く先は未来だろう。唯一の海とは何か誰にも分からないといいつつ、「唯一の」という表現から、進化論の影と理想の未来へと向かう道筋が見えてくるように思われる。

「過去」の物語『激流』は、直線的かつ必然的に「未来」へと連なっており、巴金の「現在」は、そのような確固たるクロノスの因果律の一環として呈示される。巴金において、「過去」はすなわち「現在」となる。

注

- (1) 巴金「關於『激流』」。『文匯報』一九八一年一月一〇日初出、『創作回憶錄』（香港三聯書店一九八二）、『巴金全集』第二〇卷（人民文学出版社一九九三）所収。
- (2) 『時報』一九三二年一月二四日。
- (3) 同時期の他の連載小説を確認すると、連載回数は、沈從文『記胡也頻』（一九三二年一〇月四日～十二月二九日、当初の題名は『詩人和小説家』で一〇月一五日より『記胡也頻』に改題）計三四回、巴金『春天的秋天』（一九三二年五月二三日～八月三日）計四九回、沈從文『儒夫』（一九三二年八月四日～九月八日）計三六回、黃仲蘇『悠悠』（一九三二年

九月一〇日～一〇月二五日)計四五回、蹇先艾『四川紳士和湖南女伶』(一九三二年一〇月二六日～十一月二四日)計三〇回、林疑今『上海兩少女』(一九三二年一月二日～二月三十一日)計一九回で打ち切り、李薰風『北平小姐』(一九三三年二月一日～八月八日)計一八七回。『激流』の計二四六回は、相当多いことが確認できよう。

(4) 前掲「關於『激流』」に拠れば、当初『時報』編集者の吳靈縁が、『激流』冒頭の数章を読んで連載を決定したが、吳靈縁は一九三一年末までに、病気のため故郷浙江に戻っていた。

(5) 筆者は、新聞連載小説として『激流』を見る場合、時事的な事情で紙面が変化してゆくことを重視すべきだと考えているが、この点については別稿を用意する予定である。

(6) この作品は、あるいは時報社の謝罪文中にある『上海交響楽』を指すか？

(7) 一九三二年一〇月二七日に、『時報号外』読者に告ぐ」という囲み記事があり、中に『時報』の最新式輪転機は印刷が迅速で、かなりの時間を節約しています。『時報号外』は、毎日午後三時に原稿を載せ始めますが、三時以前の各方面の電報ニュース、地元上海のニュースをことごとく掲載し、詳細さと網羅性を追求しています。」とある。号外についても、言わば夕刊の感覚を併せ持ったものだったのだろう。

(8) 上海事変時期の『時報』の号外には、『二月九日午後四時 二月一〇日午前七時』のように二日にまたがる日付が付されたタイプと、『二月一〇日 時報早晨号外』と書かれた朝刊タイプとの二種がある。注釈(7)から、前者が平時にも発行されているものの延長、後者が非常事態に対応して作成されたもの、と考えられようか。

(9) 一九三二年一月一、二日号外は、東京大学東洋文化研究所所蔵のマイクロフィルムに、紛れ込むようにして入っていたもので、林疑今『台湾的女児』掲載時期の詳細は不明。

(10) 林疑今については、①『中国現代文学作者筆名録』(湖南文艺出版社一九八八)、②『中国近現代人物名号大辞典』(浙江古籍出版社一九九三)、③『魯迅全集』第一五卷「日記」(人民文学出版社一九八一)の人物注釈、④『中国翻訳家辞典』(中国对外翻訳出版公司一九八八)、⑤『中国現代文学総書目』(福建教育出版社一九九三)、⑥『民国時期総書目』(外国文学)(書目文献出版社一九八七)、⑦『民国時期総書目』(文学理論・世界文学・中国文学)(書目文献出版社一九九二)を参照。生年月日は①、林語堂との親族関係は②③、学歴、職歴は主に④、著訳書は主に⑤⑥⑦に拠る。

- (11) 「關於文芸作品的派」は、現在の多くの作家は何々派、専門家と自称していて滑稽だと述べ、十の派と一一名の作家の名を挙げ、揶揄したもので、年令に見合った幼さが見える。新浪漫派を自称しているとされた郁達夫が、「關於文芸作品的派」的訂正（『語絲』第四卷第五二期、随感録二二二、署名は達夫）をものして反論した。『語絲』第四卷に設けられていた雑文コーナー「随感録」の、全二二二篇のうち最後から二番目にあたるが、雑文の投稿が下火になっていた当時の『語絲』の状況を、はからずも象徴的に示す文章と言えるかもしれない。
- (12) 第九回までと第一五回、第一六回はマイクロフィルムを欠いており、連載開始日が確認できないが、第一〇回は二月九、一〇日付であることから、少なくとも第一〇回から第一八回までは、連日掲載されていたことが分かる。
- (13) 「美国当代問題小説」。『時与潮文芸』第二卷第二期（一九四三）所収。
- (14) 『無軌列車』（良友図書館印刷公司一九三五）。筆者は上海図書館で入手したが、全三五六頁のうち四頁落丁があった。尚、『無軌列車』には『上海兩少女』が一部書き換えられて組み込まれている。林疑今は、書きためた小説も利用しつつ、『無軌列車』を書きあげたのだろう。
- (15) 阿呆（＝徐卓呆、一八七八—一九五八）『往那裏逃』（一九三二年二月一八、一九日付号外、掲載終了時期不詳）。上海事変の勃発を受け、当時新聞各紙には、事変に題材を得た作品が数多く登場した。作家はいわゆる鴛鴦胡蝶派が多く、このような情況に対して、阿英「上海事変と鴛鴦胡蝶派文芸」（『北斗』第二卷第二期（一九三二）原載）は、特に張恨水と徐卓呆を取り上げ、プチブル的だと批判している。

*本稿は、筆者の博士学位論文「民国時期巴金研究」で扱った題材をもとに、ほぼ新たに書き起こしたものである。学位論文審査の労を執っていたいたのは、主たる指導教官宮尾正樹教授の他、相原茂、大塚常樹、小風秀雅、田宮兵衛の諸先生である。記して感謝申し上げます。